於高嶺復讐

へ13
188
2

へ13
188
2

拾13
188
2
東京帝國大學圖書之印
伊勢善
命亦欽

孝子高島領復讐巻之二

田亭等琴著

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小親を易めぎる道はあるまじきものを不便なるかな
捨て母を養ぜんと心は既に変めるるるも生あるて子を遺ふ親のなるひなるふまじ
念々たる只此児紀とりまるを捨て行かんとまり如れ
ぢいりふ心強き人ゆもあるとて躊躇やでありぬ
やしるひぎ今日と暮ても兎角に悔りがらなるふ母と
子はいよ〳〵創ふ望るつるふぞ今はるや詮方なく自
ら志と所母ふは長谷の観音に祈やべきことありて
詣ふでひなりといひ〳〵二歩ふ行るる程に腰ふ

立出ぬ〳〵実おうるふ此児ぶ薄命のかを思
はるふつけ亡夫の言置ることを想ひ出し吾子
今新のことくなりと若憐ふるる人に拾はれ成人
の后いかなる生身をとんも量りがるべ〳〵ふ夫の遺命
ふまるを彼短刀を添へて捧んふ此の親の遺留物と想
ひ佩るるぶふなるるぶ夫の老宅へうまでくて又
立戻涙ふるるふ短刀をとり出し歛を台に縁故と見
の生れ年月とを写つけつら行代歛とそらの裏ふ
納め泣く家を出行くり此夜は見霜月十日あり

小菊丸を
養んとて
と掃る
古長谷觀音ゟ

小〳〵て月清く風冷じく肌を刺す如くなれば聲嗄ふ
著〳〵人〳〵も尚慥まらずおぼゆる小者ハ俟く小百姓
衣むとつと身ふまゝひたすらしバ猛ち骸冷手足さへ凍て一
歩も進まじくさふこさら最愛のそとうごを捨ん
とあぐる途なれど只涙ふのみかさられて足のつゞあ
綾もるく漸く初更の左側小長谷の観音堂小着
ふてる素より小茂ハ此親世音を深く信し奉る
頭〳〵母の病平愈の祈ハこのなりぬ今宵もまゝ
其とゝを先とし次ふ吾子の福を祈りるやうハ

や大悲の誓ふハ枯〳〵木ふも花咲と云ふるふとそ
聞佛ハ霊験他ふ異ふまゝまして坂東巡礼第四番
ふ〳〵せのふ原ハ大和の長谷ふ在りるを慕ふの昔
流水の爲ふ流されもい遂ふ鎌倉の馬入り
漂着のひしを飯山なる恐性法師と大江廣元と
議〳〵此地ふ安置し奉り今斯目出度家へまし
まゝハ云ふふ此国の衆生を済度しめん方便
とゝそ現ひまい〳〵せれるれど母が病を頓ふ愈し
のひまゝふ今摂る子が身のうへ御佛ふあやう

ゆゝ護らせ給へと涙とゝもふかゝ頼ゝなくさてし
何憂う捧ぐべきと興寺の並なる人家の軒と棄西
と徘徊躊躇するうち三更の鐘こうゝと音な
ひ往来の人もとだえして四方も寂寞ふなりもくふ
水瀬川の流るとハ実ゝ箸き友ふ後ゝ一鳥い刀
なく鳴度るふぞ哀ふ添ふる如此なれ
ばいとゝぞもかゝると涙ちぐゝふ袋子ふ乳房と舎
まゝ云へりるハ鳴呼いとゝの吾ゝや今ハ頼
ふ一世の離別あるふやゝ飽まゝふ乳とあるを

おそひかゝるそは世の中ふおとゝ石ど親ふ縁ふさるのハ
あらまゝ僅ふ二才ふして父ふ死別今ゝ母ふ死別誰ふ
養ふ給そ人となるべき曙郊の雉子夜の雀督子
を想ふハ生あるうのゝなゝひなるふまゝてや人と
して只ゝとりの子を持る母ゝ心ハ鬼よりも蛇よりも
恐ろしゝと必怨ぞゝ是渾て世の因縁ふして
甲斐なる紀家ふ子と生れゝて薄命なり幼な
きうのふ云んハよゝしあるとりきとふハあんとゝんぞ
上今更ふ云ふいえるぞ思あとゝゞ爲ふハ祖母

が爲小母ちゃる人乳のみ〳〵でハ命を保ちかねる
こゝあるゝてハ母人を飢よ多ゝ詮ぶへたりさい
憂事をゝ微つるぞと嘆く咽くて嘆くゝ
あてられぬ光景なり小菊ハ衛〳〵涙を拭ひ顧て
覚悟のこゝなのゝバ心弱くて果せじと自ら心を勵し
けゝとある門四ゝ吾子をゝて既ゝ去〳〵んとする折
う〳〵北風颯吹落し寒さ肌を刺てゝ〳〵ゝ幼児
ハ猛ち目を覚し呼と泣を小菊慌忙く抱とる声
たゝさゝゝと乳と含まする悲さ酷虐さゆゝるく

涙よむゝび抱きしめ嗚呼憂恼や道理あり互ゝ知るゝり此
現と子ゝ長き離別を做ものを木石ゝて作るゝへゝ
もあるまゝなゝ泣ぞゝてあるぞいゝ貧苦ゝ迫とハ
ゝて吾夫此垂ゝ〳〵まさばかゝふ嘆ハとまゝじきものと
ある意〳〵の吾夫や惻らしの吾子やゝ口説たゝつ
声を恐泣涙〳〵てぞ嘆きゝりかゝふ哀を心なき犬の
夜更て門をゝ人の姑むを咎ゝ一犬吠ゝバ万犬猛
ちゝ應ゝ渾一般ゝ吠〳〵〳〵ぞ四方の家〳〵ゝ怪
み偷見やるゝゝいけ〳〵起出集會光景ゝ

唬的見付られドと吾児を捨跡小心ハ乱るれど詮なく
なさふ泣くも我屋をさして皈りけり

第三

旅僧大士閣小蘭児を拾ふ

且説小蘭ハ我家の門多るまてハ皈来ぬとも母の吾
子を問んとて何と答ぶべきと暫ー躊躇てありけるが
斯くも果べきふあ〜孫ぢなるくも裡ふ入まづ母
の安否を問んとその臥所ふ行くるふ豈料きや
母ハ両ふ斬られ鮮血ふまみれるふ〜なりてあ
るふで愕然とおどろき魂も消心も乱れ何とも

〜〜〜〜のまゝ屍ふ〜〜〜〜り声のかぎり泣伏て天ふ
悲しく地ふ泣く既ふ絶入しゝまく蘇生て嘆きるハ嗚呼
恨めしの世の中や恨ふ孝行まるこのハ皇天恵このひ
福を降しのふく聞どそハ偏ふてやあ〜るん奴家
愚ふして聖の道を志ふ孫ども親を大事ふまるこハ
露おこ〜〜〜ぞ〜れば〜〜親の為〜てみを持ふ行〜〜
跡ふく母人のかく浅猿き非業の死を遂るひしハこ
ハそも何の道理ぞと天を恨世を嘆き此夜ハ終夜
泣あ〜〜ぬさても其夜も天明ぬけど小森ハ深き

強八
虚六平
母を
害す

小徒み起も出ぞあるる程小隣伍曹甚異
事のあるやらんと訪ひ来たるぶ小菊母の屍
を泣居るを見て大小驚きそゝいい
の縁故を問へば小菊昨夜の一五一十と
小云聞るる邑人ホその至孝のほど感に堪
薄命なる母ぶ横死を憐まず人を長谷小通
幼児を抱へ幼児を拾ひ何方へ去ぬと
あるぶ素べを小由なく其侍小なり 最老

母ぶ横死の光景を保正小告公訴れども仇を索ん小
も證なく孫ぶ空しく撿屍官をうるのみて 行
忽ち小倚るるなど小老母ぶ屍をも邑人の情をうて終
一条の烟と入るり斯るる后小菊ハ正小是空を翔鳥
の翼をうるの孔地を走る獸の足を断たるふ如き
身となり由るる小涙の乾くまもなく熟く思惟う
倹く小一年も満ざる小親夫小死別を子小生別ること
無小希なる薄命なかるべき中小も母ハ人小害せられ
非命小亡びのひぬる晩氣さゆるるあ一と云へ何

者の業にも知るべし雙べて報ひぐさとさへ叶はぬは是偖
又妻の因縁ふかきは前日高野沙門
の云々刀の妖祟を做すやうんかぞうり出るこのと
和らげたまひて吾ふ添て遣るべき拂ふさへ親くる
道ハ失つるふ禍までと移やらんとハあひ出も漆樹や
奴蒙のをかくてあるて雖面々ん寧亡人の教るりまるの
殺や夫ふ見んものとおとゝ賞悟を志ゝし又想
こゝ新まて罪障ふさ身の今死ふたらんふ未来
のいかゝ恐ろしゝふ厭ふべきふあゝ彼ど亡人の冥福

をバ誰ろよく吊ん我今よりして墨の衣ふ姿をゝ亡人
の菩提ハさらあり乞よふ我子高野沙門ふ拾ひ
ゝとあらバ彼西山ふ尋行ばバ親子再び環会ても
あらんと思ちふ心を潔し日頃信ゝ奉りゝ長谷寺ふ
詣て住侶の僧を頼ゝ法ゝ緑の黒髪を切拂ひ菩提
の道ふ入ばハ甚殊勝ゆも賢々れ今此ふ虚六平
が老母を害ゝ立去りゝのハ何者ぞと想ふふ同
郷の悪棍強八ゆてぞえゝり是何の故をりて老母
を害せゝとゝれバ虚六平来ふありゝとき彼短刀を

乞索々れとも無くざしを易〻ぬことふ想ひ〻うど
盧六平も素武士なれば強〻乞んハ利害いろんあん
と考るる処ふ近頃盧六平辞世はなをバ心易〻と去び
寄ふ忍び入〻彼口を奪んとも〻ふ老母ハ聾なるを
こゝと咎〻を只一刀ふ斬殺〻尚短刀を捜を折〻
小菊の殺り事るふ驚き後の方より去り去りし
故下一頭却説前日盧六平が〻と小扁〻高野沙門ハ
何者ふ〻ていろる縁故をとゝてこゝとをとるるそこゝを
是高野山南谷南光坊の住侶〻て仁海と呼

ものあり〻り此僧傳學秀才の知識ふて大師ふ
燈これが為ふ光りを添ふぞきほどふあり〻るをバ一
、故近国の道俗るを敬ひぬ怨るふ齢不惑ふ及
ぶ字内ふ眼ふ〻大師の跡を蹈なふ〻諸国行脚
のこゝハいまゞ全たゞ〻ぞ〻り〻前年西国四国をば
回国〻ふ今年ハ東国の霊場へ詣でんとゝてこゝを錄
倉をとるふ〻盧六平ふ家ふハ扁り〻るとかろうさても仁
海盧六平が家を辞〻陸奥の方へ却さ周〻霊場
を巡礼〻て殺るさま〻此鑑倉をとるふ長谷乃

観音堂の最小逕過るに紀日既小暮れバこゝ立ち
寄今宵ハとゝ小通夜さんと佛の傍最小うゝ〜こゝ臥く
経夜経を誦ゑ称名してあり行る小三更小やあらんと
おゆゝしき左側此堂の最なる人家ゐて捨子ありしと
云ゝて騒ぎすゞしるゐゞ小甚憐小想ひ其處小
往て看る小二三才ばかりとおぼしく清らかなる男児
の戦〜わゝぐるゝ一挿の短刀を添て捨られたるゆえを
ゝう毋邑の按をして捨子あるバ公小訴へ出児小とら
をゝと小あり行をば這回もその法のごとくせんをど

邑人の云つゝを仁海うゝ〜ありぬべき児とひげ
るゝ白児小ゝ〜と坐小愛恵さゆるゝくなくて
想ひのゝるハ我今毋狐を養育てゆゝ〜僧ともなゝ〜ば
衆許りの功徳ちゝ〜んと邑人小ゐひ貴ひ得て此處をバ
將ゝ去りぬとゝいまゝ〜乳なゝ〜で養育雅さふほゝく
惱ゝ兎やさまゝ〜角やさまゝ〜と想ふ折ゝ〜恰好夫婦
順孔の是も一二才ばかりなる女児を倶〜ゝ〜ゝと道づ
とゝりゝゝふゝ仁海心猶〜親ゝゝ〜ゝ物ゝ〜〜しゝゝ
同を問ふ夫婦答ゝるハ小人小ハ高野山の麓紙屋岩

仁海孫作六
夫婦ハ
椅子と

小住める孫吹六とやらの少て妻八尾花と呼んが慨然
どもをそそうしゝ近頃うち續く悉く失ひ僅ゝ此女児
掃児といつるを一人殘のゝ新薄命なるかゝる世の作業
悪しくて今生ゝ報ひまゝると賞くゝほどゝ罪障消滅の為
且八己子ゝもらう後世の為東西の観世音を巡礼し奉
んと兼年西国ゝゝとゝば順礼しゝゝ今時東国を順礼し
只今飯路ゝ赴ゝなりゝらくゝふ仁海寺び我名を名告
次ふ幼児の縁故を説話あるれ同邦の好身ゝ此児
を伴ひ飯り四五ゝまでゝも養育たびゝんやとゝろか

くも頼ゝまへゝれば夫婦ハ仁海の芳名ハ頼ゝ聞ゝび
つ且孤ゝと養ん中ゝ無量の功徳ぞと想ひ子細なるく
らけ引ゝ仕ゝ仁海ゝとゝゝ喜び瞞中ゝう養牧の
黄金を取出しゝこハゝやうふハあるゝど幼児を倶した
まへゝ豊路の費多ゝうんゝふその償ふわてゝゝゝ
へぬゝゝゝ夫婦ハ固ゝふ辞て受ゝうと多方ゝゝ斬く
ゝふへて云我ハこれより信濃国善光寺へ詣でんと趣
へゝ此処ゝゝ別れゝゝゝり程なゝく帰山して見給の時
今日の好意を謝しゝゝと云ゝふ夫婦紀ゝしく云ゝう

おぼつかなく世間のことを露ばかりとめおくべき縁とて詠
ませ給ひ我〻夫婦ようやく養ひ育てられぬるに世間の
名をば何〻と呼ばんとあるに仁海ぞ〻〻考へて云
ふ〻〻世間素より名あるべきにあらざれども捨られぬる身
名を知るに由なし成人ぬるまでの后吾大師の法流汲
汲めとなれば心をこそ汲ととこそ呼べ名れ名はあれど
汲と云ふ文字をもて人の名に呼んも異世なりとぞ
訓同じくて目出度文字なれども糞と云字に
易べしとなれば糞助とぞ呼べりける世

糞助といふる人の子ぞと想ふに是虚空平らかにて
ほとゝぎすの小苑に捨ぬる子ゆゑ有りける初も仁海
八斯のごとく小約にけく夫婦のこゝろに別をなし
信濃路さして赴きぬる

於梅
糞之助

伊藤善

花雪吹高嶺復雙言巻之三

東　曲亭馬琴著

第四

寡婦媼を貪りて[illegible]

且説頭八を盧六平が老母を討て立[illegible]

なりしとはいつゝ何とふく影護て鎖[illegible]

善光寺の邊ふ知るるものゝ住居も物凄く

暫く鎖倉の動静を窺ゝる奥ふ[illegible]彼所ふ立越

婦わらはり名を雪路と叫びぬ年紀三十ばかりなる

少し盛過たれど散残る巴香高麥[illegible]

ほとゝの婆あり是素冨饒人の妻か しゞ夫そ三年前
辭世強仕まゝ何足るぬこゝてあるゝめゝハ夫
を淫ふるそのなゝし然るふ此婦ゞ性質貪利好
色なるゝ夫辭世しゝろ血屬の后夫を迎へよゝ
ゝしゝゞ夫あゝそハ已ゞ心のまゝふ
よゝて固辭密ふ風流あるゝ少ゝ婦れまゝハ聽
ゝのおどし憚ゝゝぶゝゝこゝのゝを行ひゝゝ斯
酒ふのゝ沈うし故ゆや近頃氣慰ゝなゝりゝるふ
そ多方ふ醫藥を用ゆれゝゞ其ゝしゞ或醫の

云ゝゝるハ病を素無疑生ゞあれゞ斯ゝあらんより當國
諏訪の温泉い諸病ふ驗ありゝ遠近人の集来ゝことの
不ふ熱雨ゞ彼所ふ往て湯治しゝゞ自ら心ゝゝ
鬱氣晴て病もおゝゝゝゝぬゝしゝと効ひるふゝより最頃より
諏訪ふ来て湯治せしゞ漸くふ快氣て今ハほゝゝ全
諭ゝゝゝゝ見ふゝゝり此當時都より牛都ゝゝゝ聲此
地ふ来て湯治しゝてあゝしゞ世ふ聲ゝゝゝることハ大ゝゝ音
曲を業ゝゝふゝゝこのあゝゝゞ此牛都も筑紫琴のかゝ手
ふてゝゝゝ深く好々ゝゝこハ一夜徒然ゝゝゝふ

雪隠
春清

をとゝ出しゝうさゝゝしゝ声面白謳ふ是誰知此一曲ふより
て一条の春路を辿さ生し牛都と雪路の臭と已らずして一作
を下し来る萌とふなりゝし此牛都と雪路とハ只局一
重を隔ゝるのくなれば雪路忽ちふこれを漏洩ふ呂律く
整其音清幽哀怨そゝろふ心動り素よりの好色なるも
のくなゝひかゝふ業をば愛るあるふ殊ふ都ふも少ろる妙
手なれバ深く聽われその人のもうしく隣の紙門の隙よ
りさゝ眺さ窺へど障るものありてさゝぶろふ着へぬふいゝく
ゆゝしくいろゝる人そとさゝゝゝふ出し扉の下襲ふ向へで

都うくのうちのあるよゝしを云向へし侍ふ聲ゝふ聲ゝふ
くん渾て風流ゝるこゝのゝ多さふ声ゝく斯優ふ中ゝ
きハその貌もさぞ艶なるべしと頻ふ春情動き鬼角想
ゝうゝ夜も更ぬるさぶ琴の音も止ぬ雪路いとゝふいなく
孤多く想へゝきこと詮もくへうて寝ゝう」か其夜三更ゝ
ぬゝくおぼゝしゝく左側地おびゝく揺ゝう震ひ出て山崩水溢
るゝゝるくなゝゝと雪路と牛都ゝ間ふ隔ゝる紙門くゝく
仆ゝゝく燈さゝく消ひゝくまゝ暗くなゝうぬゝふ雪路ゝを
素より地震と恐ゝゝくと大ゝくなゝゝ孤ゝ戦ゝゝくハ

何ゝゝゝゝゝゝゝ紙門の仏をもつて持ち入
りけゝある恐ろゝ助けのくと平都小ゝと推さけき
て懼ゝてとて居ゝりくる斯ゝ漸やゝ地震も止けるゝ
雪路をゝめて心おちゆゝ此光景を知ノ恥らい退そこそ
をゝゝゝあきこゝゝておぼゝめされんほども恥し急ぎセ
めくてとゝゝあゝふ平都何ろの苦ゝかゝくゝ女性の身ゆゑ
さこそ、おそまきらんなゝと云声平ゝゝく霄小謳曲師小仏さ
ゝ仏ゝ裡密ふ喜ひ市身ハ霄のわゞく唱歌あへるゝさまおい
ゝゝやと問ふ蘭ゝうゝと應ゝれゝこゝろゝゝゝ

もゆらて四方山の説話よりして己身のゝゝふ及い若しゝゝ
ゝゝい吾之家小誘ひやさんといつるを云奇るべゝき「詞の主」
ゝゝゝ霄小謳ひゝくゝゝを聞て心まゞひわこれたゝ想
ひいたゞゝと云聞ゝゝゝゝば牛都岩木なゝゝゝゝゝゝゝ幼
ゝゝゝゝゝゝゝゝて眼瞽し不どゝゝゝゝゝゝ醜さいゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ事小遭ゝゝゝゝゝゝゝゝ

の牡蠣の肉を双へ懸るごとく皐凹け口曲て疱疹の
跡ハ蜂窠ふ均しく粒ハ愕然と帛とふけしるの四月
うふ斯と知らるばちるく露ども嬉戯ども
さまざましやとなく悔ひ怪く慌忙袖を拂て已ら住處ふ帰り
此時浴室の主謁ふて未て云昨夜の地震ふ浴室の
ものとゆへで修理を加へでそしてふ浴のふことと能てどとある
小雪路此時病全く愈くれぶとて幸の事ると想ひ
暴ふ此處を立去家ふ帰ふんとせしを牛都くく
も聞知雪路をとぐめ約言のごとく倶ら往んとあら

小没理會心ゐるくぶも打連て吾家ふとく帰りくる且説
雪路ハ一時の春心動しふよりて曲ゐさえめを俳ひ来
つと只顧忌を厭へどと云目の癖くて疑妬心深く
雪路が難面歎待を怒り時ともてハくたるを言云
罵などをれば涙くく蹴を追去んとせしどさくふ
動うぐほとく惱いふふぜやと場ふ折うく泉ら
說話ゐる処の強八虚六平が母を害し鎌倉を立去此
地方ふ忍び居くしが悪因縁の爾らむる所ふして
いつの程よりか袁彦道が氷人となり強八雪路も

とふたらいしふ素より任侠を表とまもるれハ尋常乃
鄙人とハ異草り少く風流なる容貌ふ雪路も愛る
心あるとハ強ハも雪路ハ姿色あるさくふ家も貧しか
らぬれば思うまぬ想ふほどふ互ふ心通ハせて終ふるう
ち妹脊のかくらひをふくる新くよりのちハい
よ〳〵牛都を厭ひ密ふ人ちもぞ亡んと二人只顧その
なすことを謀りなることを方見なり一日雪路牛都ふ對ひ
云つるハ此頃奴家が知識なる〳〵方ふくあんをの
琴調ふを聞たく〳〵とくとぞ今宵彼所へ奴家と

倶ふ往ありなんやと勿論ば牛都何の心もなく易きほ
どのことなりうと皆〳〵連だちて出ふ今此時
ハ是十二月の中旬なれば外の国ぶも雪ハあるふまし
て此国ハ世ふ知られぬる雪国ふて積ること〳〵人家の
軒よりも高く国人ハ容易歩ミ難くふて至ること
絶て往来なくふまして聲の牛都かくふべしとふ露
ちぬぬ歩ミ悩ひと雪路ひしく雪履といくるものの
をくうせこれもこれとくさちて牛都もを拔け
牽いそぐしたく〳〵歩ミくる此雪履なるものハ雪

圖の人用ひて雲中往来の便となりさて雲路
八牛都を欺き名ふ〳〵おひたる国の桟ある山路う
とゝハ遥るゝぬ嗚呼這牛都う傘ハ只是旭ふあふ霜の如
又同の頂の燒火ふ似て大ふかりしを強ハハ示し合せ
ることゝなるべ最刻より此処ふ待うけてあしう只今
二人う来るを着て法〳〵走出る牛都を捉へ逢ける
谷へ搏し落ちぐ可憐其所の岩彼所の石ふ
鱗くふ轉ひまろひてハ落るゞ其〳〵ひとふ呼こと
叫びて苦〳〵む声甚哀ろおそろしく谷底ふ響る

らんと想ひこゝろハ四支断くて叫ぶ声しゆへぐたりう
ふりゝ強ハ雪路を互ふ面を見合せ爾と笑うち
法〳〵く我家ふこゝて帰りかゝりしう強ハハ雪
路を家ふのゝ居く晝夜嬉酒をの〳〵楢まくふして樂
しゝゝゝる牛都そびく七日ふ當る夜二人相對て
酒ふ〳〵かゝし想ゝゝて夜を蘭野寺の鐘ふうゝ音
ふ驚ゝいぐとく瞳らんと同し褥をうち被ぎ抗と
双べく寝んとする折ゝう朔風颯と吹おろし雪おろ
しの音ゝうく響と均しく遥る山の方ふて

あふくと牛の吼ゆる声聞ゆる小二人怪しき雪おろ
しハ常なるまど此雪の夜小牛の吼あるこそ異
なれとうち語ふうち漸くに小牛の声近げくふ
者う甚あるれある声ゆて謳歌ゆのありいよく怪し
き耳を傾けて聞くふ枝の雪撫へで雪ハその人の身
ふこそかゝまと思うさよ想ひ〳〵深き谷の雪積る怒ゆ
着よや君はゝる恨を知や人とちかゝしく謳ひ
はく雪路が門を来ると忽ち咨〳〵と叫びるその
声正〳〵牛都が谷〳〵轉び落〳〵ときの声ふ彷彿

ハ雪路忽ち色ゆ笑ひるゆ恐ろしく褥うち被く戦く
居るふ強ハハ恐くくるある男子なりへ挽色ゆおけ
る刀携へ外の方の戸を拉ひて窺ふ大きゆるる黒牛
ふ牛都うち蹲りてゆくるゆそさきくの強ハ愕然を
して身毛いよゆ竦くて心弱くて叶くゞと声あらう
ふと云恐さ法師の光景ふいで物ゆまゞきとカ
援て斬はくまで焼なんどを消きごとく牛都
も形ハ消て失せるゆ忽ち棟上ふ呵くとうち笑ふ
声のいと物きごくそ聞へるるれう此夜を

とし夜ごとに牛都が怨霊来ること前の夜ふかくなるまで
なるを小雪路強八もいぶかしてら毋縞を免まんと心ゆる
あるを怨み者くしたる一夜ゆゑものごとく胃謳
なるが此夜はうとうとして物もごとく聞へ門をゆ来
堪ふ時声頻小歌なるが二人ゆく心あり今霄
吉め止てあらしと息をわりとつく折ゆく拠を
建なる暴風を冒ひ入るものあり二人ハ怪しみふ
何ものぞと看るふ〳〵いふ牛都世ふあらしの
の容貌ゆく飄くて歩来ふゆゑ雪路ハ驚き呼と呼

んて絶入さう強八此光景を看心慌忙枕をうて投付れ
バ牛都が姿忽ち一團の鬼火となり雪路が面ゆ掩ひかゝる
よと見へし其まゝ消て失ぬるゆ強八も暫し惘然として有
あるがやゝあつて雪路が絶入たるゆ心ばせ薬なんど与へ
て呼活し人ごちハつきぬるとゆ怪哉顔色鬼火ゆ撲ゆる
如悉焦煉痛を堪ぐさふゆゑ嘸的まとひ搦くゆ醫療
をうゝるれば漸やく痛ハおこたりたるとゆ鬼火ゆ拙さ
る痕ハ尚愈ゆ双眼ハ聾鼻凹まり口曲て牛都ら面しい
彷彿たるさゝふゆ心ゆ頑畳たるゆゑ強八始の怖ら

千都う寛兒
媛婦ホ
紫子

病ふようて顔面のく草りくことよと想ひしが心なの
ゑづく少さことあるも意ふ叶ずくれハ腹くして四つ
ほどふ今ハそや早き蹠くくく此家を去んくくくれば
うち恨くてあるさぞ故雪も深くくれば心あくずく
暫くく此家ふ留り居ハくくくり

第五

怨鬼蛇と為て奸夫を苦む

旦説強八ハいよ〳〵雪路を厭ひ物を窺ひ密ふ出行んと
想ふうちくやくも二月の末ふ及ぶりくれば寒くも小積
し深雪も和暖なる春の光ふ消なんとし人の往

来もたゆる跡くおぼゆれは一夜雪路熟寐くくるを窺
ひ貯へ持てし貯を奪ひ密ふ家を忍び出鐘倉の方
を志し雪踏ならして走るに暗の夜なりとも
少や忽ち道を踏差え菊日牛都を殺ぎくく山路ふぞ迷ひ
此時何とも志ん頻ふ膨れ一歩も進み得ざりしほどふ
ゆく岩陰ふ倚て休らひ痛くいよ〳〵強くなりて呻吟
苦さ堪ぬ且説這裡ふハ雪路強八が走逃たるを怒り怒
ちて是ふ顛子のごとく狂ひ煩悶終ふ家を走り出し
雪とうさたる方もあくふ眼さへ看へねど足のまく

狂ひ走りくるぶ宝も因果の報ひきぬうれぞ〜そさいつろう牛
都を殺せ〜山路ゆ迷ひ来て早くも強八う呻声を聞こゝ磬
搜ゆ家より恨の隈数へたていきまきあらく云罵預て痛
備やしたりたん氷なりも懐剣を抜らて突かくるを強八
慌牡く身を拈りたれを避くるを尚逃まじと纏つれようゆ
ぞ叫時強八些く痛くおとりうれば早く足を揚てこゝ
と蹴るゆ雪路が心下ゆ當りけるこばなじゆ少しもたゆべ
き忽ち身を轉し遥の谷ゆ落ゆくる其光景牛都がら
ゆ死くる時のごとく支骸そゝゆ鮮血ほまくれて失す

り叫時谷底ゆく嗚呼燥脾胃ゆるとゆ考えのれくる声の
嶮ゆ谷響て恐ろしく聞へしが不思儀や谷底より一道ゆ
鬼火張くと燃あがり強八ゆなりさかくぶりと看へし
怪哉強八叫びて絶入たり嗚呼是因過ゆ還る車輪の
ごとく前ゆ牛都が怨念雪路を醜女ほ強八の中を
裂二人を此地ゆ引来らせ強八がをかつく雪路を殺せめ
恨を散とゆくる悪因ふがくゆ又雪路ゆ怨鬼強八が清
情ゆて残忍なると怨り斯崇を做すをつりり是渾こゆ做を悪
業の報ひ来ゆるゆこゆ此后強八尚甚の祟をゆ禀く

そゝ下回り分解を聽粤ゝ高野山南光坊の住侶仁
桑炎を孫次六夫婦ゝ託くその身ハ善光寺ゝ詣ゞし
深雪ゝ途埋て歩難しほどゝ暫く善光寺ゝ逼
アらるゝ程や〳〵雪消して驛路もゑ〳〵けめるゝゝいさゝ
野ゝ飯んと今曉朝まゞさゝ善光寺を旅發て今此棧
道ゝ運るさゝしゝゝ強ハゝ絶入るゝ所ゝ事ゝ此
光景を着く甚便たゝさゝゝ想ひ纏たゞ倉ゝせ
多方ゝ炎保せしゝば漸や〳〵ちつきゝるゝゝ仁海喜びまゞ
何處の人ゝと問さば強ハ意言をせんとそゝこゞ何ゝ

そゝ腹のさゝを經なゞりて締らくゞゝ息ゝ仁海
あゝねばいと憐しゝて懷の裡を覗るゝこいゝゝ大ゝ
る蛇の二重三重ゝ纏ひさ頭をもたけ紅の舌を閃しゝ
さゝも膽太ハ強ハも驚き恐とある苦ゝ助けゝ給父
やと叫びまゝひて腹を露ゝ狂ひくゝを仁海熟くゝと
看るゝ〳〵かゝることゝと怪ゝゝなゞ〳〵其苦患を救んゝ
頻ゝ真言の秘文を唱へ念珠ゝて彼蛇を撃りゝば堅
く締るゝゝゝ尚素のゞゝく肌をゝらて
あらはれゝ仁海強ハゝ對て云へるゝゝゝ正さ

人の執念とおぼゆ容易ふ免るべくもあらぬ早
革身のほどを懺悔して佛の道ふ入るべく貧道
山南光坊の仁海といくるものなり紀山ハ女人禁制
場なのゆゑ吾と倶ふ登山しかく蛇の怨ハ頑ふ石
と說示ふ強八身の苦しきがまゝふ強悪の心ハ神
身の一五一十を懺悔して使者とよしかくとかく願
聞ふゆゑバ仁海人を救ふハ素より僧のつとめなれふ子細
なるゝと兼引てまゝふ強八を倶ひ高野山ふ赴くるが
日數經りて既ふ山ふ登女人堂をるとき不思議や

四方の馬琴おもひ其
切梅
第五編 弥太郎源復讐

書肆 伊勢屋善兵衛